

2021年横浜ナザレン教会・復活節第七主日(5/16)礼拝

「仕える者のように」

ルカ福音書第22章24節から第22章34節

### 【聖書】

ルカによる福音書22:24 また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。25 そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。26 しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。27 食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。28 あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。29 だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。30 あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

31 「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」 33 するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。34 イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

## 1 聖餐の食卓

先週5/9の礼拝では、竹森満佐一牧師の説教からルカによる福音書第9章山上の変貌を共に読みました。今週は、ルカによる福音書第22章に戻ります。一週おきましたので、5/2の礼拝を振り返ってみたいと思います。主イエスは、使徒たちと共に過越の食事の席に着かれます。主が願いに願って実現した過越の食事でした。この過越の食事は、出エジプトの際に現れた神の審きと赦しが、全く新しい意味で、今、起ころうとしている事、つまり、ご自身の十字架の意味を明らかにするものだったからです。主イエスは、ご自身の十字架の贖罪を、新しい救いの契約とされるとこの食卓で宣言され、その証として聖餐を定められました。今日の聖書テキストは、その続きであ

り、主の食卓、聖餐の食卓で起こったことが記されています。

## 2 私達の現実

しかし、「親の心、子知らず」、今日の場面で言えば、「主の心、使徒知らず」。主の救いの食卓で、使徒たちは「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか」という議論をし始めます。24節の「議論も起こった」の「議論」という言葉には、「好んで争う」という意味があるそうです。使徒たちは、「使徒達のうちで誰が一番偉大か」と積極的に争ったのです。それも、真実に本質的に偉い、偉大だ、というわけではありません。「他の仲間と比べて誰が一番偉く見えるか、大きく見えるか」について、使徒たちは言い争った、と聖書は語ります。

人からどう思われるか、どう見えるか全く関係ない、何をどう思われようが、見られようが全然気にしない、という人は、あまりいないのではないのでしょうか。程度の差はあれ、私達は、他人の評価を心に入れつつ、生活しています。悪いことばかりではありません、自分のことを少し客観的に見て、反省し見直すきっかけになるでしょうし、「一生懸命やろう」と発奮する材料になることもあります。しかし、人からの評価を第一とすること、自分の基盤とするのは、虚しい事です。人間は移り変わるものですから。人の評価ではなく、神からご覧になったらどうなのか？と考える事が何より重要なのだろうと思います。

特に、主はあと数時間で逮捕されます。もうほんのわずかな時間しか共にいられない、勿論、使徒達はそういう事は知るよしもないのですが。しかし、少しでも主イエスの方に心を向けていれば、主の真剣さはわかったのではないのでしょうか。にも拘らず、使徒たちは、主の事よりも自分たちの事ばかり。自分達の欲望のままに言い争っています。なんとも情けない姿です。

しかし、この使徒達の姿は、紛れもない私たち信仰者の現実でもあります。主イエスの事よりも、天の御神のことよりも、先ず、自分の事。それも、自分がどう見えるかという事。私達は、徹底的に自己中心、人間中心です。例えば、謙遜という処においても、信仰という所においても、自身を誇る位です。誰がもっとも謙遜か、誰が最も信仰深いか、というところでさえ争ってしまう。普段は気にしなくても、例えば、他の人から自分の信仰について非難されれば、「あなたに言われたくない」と反感を覚える、そんな者達です。私自身も自分の心の中にそのような自己中心がある、と正直に言わねばなりません。

ですが、そのような私達の、使徒たちの、なんとも情けない現実、神のみ

前にあるということを忘れて、自己中心に振舞う罪の現実に対して主イエスは、きっちりと介入してくださる、これもまた紛れもない真実です。主イエスは先ず仰います。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。」異邦人というのは、ユダヤ人以外の人々の事。ここでは、「唯一の神を知らない人々」「神の民でない人々」と言えます。神を知らない人々は、一番偉い者が力によって人々を支配している、「民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。」と主は言われました。この「守護者」というのは、「恩人」とか「恵みを与える人」という意味があり、本来は慈善家などを指したようです。しかし、ローマ帝国の植民地では、帝国の強大な権力に追従する人々が支配者におもねった、そしてローマから派遣された監督等高官を「守護者」と呼んでいたそうです。圧倒的な力の差があり、支配―被支配という構図がはっきりしている中で、守護どころか、もっぱら搾取している権力者達を、搾取される側がその庇護に与ろうと「守護者」と呼ぶ、神なき人間達、神を忘れた人間達の傲慢と卑屈が作り出すなんとも歪んだ人間の現実を、主イエスは皮肉たっぷりに語っているのです。私達は、神を知らなかったり、神を忘れてしまうと、自分達の真実の姿をも見失うのでしょうか。ですから、強い立場に立たされれば傲慢となり、弱い立場となれば卑屈となってしまいます。それが人間の本質であることは、2000年後の現代世界でも変わりません。支配する側の傲慢と、支配される側の卑屈は、新型コロナに揺れる日本でも確かにみとれます。

### 3 仕える者のように

しかし、主イエスは、そのような私達の現実を、きっぱりと否定します。「あなたがたはそれではいけない。」そして続けられます。「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」“一番若い者”とありますが、今も昔も、力仕事など現場の雑用は、年長者ではなく若い人たちが担うようですが、主は、「一番偉い人は、一番若い者のように現場の力仕事など雑用も担い、仕える者のようになれ」と仰います。神を知らない人々とは逆に、上に立つ者は見せかけではなく、真実に人々に仕えよ、奉仕せよ、というのです。

ここだけ聴くと、倫理や道徳の一つのようにも聞こえます。ですが、主イエスがここで仰っている事は、もっともっと深いものではないかと思えます。「仕える者のように」というのは、イエスを自分の主とし、イエスをキリストと信じる者の根本近くにあるものではないでしょうか。

何故なら、主イエスは、「上に立つ人は、仕える者のようになりなさい」

という勧めの後に次のように続けられておられるからです。「**食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。**しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。」冒頭でも申し上げましたが、主イエスはご自身の十字架の時が迫っている事を知った時、過越の食事を使徒たちと共にしたいと熱望されました。過越の食卓で、新しい救いの契約を結ぶ為でした。契約の相手は使徒たち、つまり、後の教会、神の民。新しい救いの契約を結ぶ食卓で、主はまさに仕える者、給仕する者でした。主は何を使徒達に給仕されたのでしょうか。ご自身でした。「あなたがたのために裂かれた私の体、あなたがたのために流される私の血、新しい契約のしるし」と仰り、パンとぶどう酒を使徒達に差し出された。主が差し出されたパンとぶどう酒を、「これは、私の為に十字架に裂かれた主の体であり、自分の為に十字架に流された主の血である」と受け入れ信じ与り、食する事こそ、神の審きの只中であって成し遂げられた罪の赦しを受ける事だと宣言されたのです。

ですから、「仕える者」というのは、他ならぬイエス・キリストの根本的な在り方です。そして、その救い主の肉と血に与るという事は、最も低くなる主イエスの在り方にも与る事です。つまり、「仕える者」というのは、主イエスをキリストと信じる一人一人、そして信仰共同体の根幹をなすあり方と言えるのではないのでしょうか。他者に仕えないキリスト者はいない、他者に仕えない教会はないのです。

しかし、勘違いしてはなりません。主イエスの「仕える」という事は、勿論、相手のいう事になんでも従う、奴隷的な奉仕ではありません。では、主イエスが「仕える」と仰っているのはどういうことなのでしょう。

#### 4 支配する事と仕える事

主が、「仕える者のようになりなさい」と言われた直後、唐突に使徒たちに支配を委ねると語り始めた事が心にかかります。28節から30節「**あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。**」ここでいきなり話が変わるので、28節以降は、全く別の話だと考える人々もいます。また、「人に仕える者となったものは、終わりの日に主から支配を委ねられ豊かに報いを受ける」と考える人もいます。しかし、29節で主が「支配を委ねる」と言っているのは、未来形ではなく現在形です。主は、地上にあって使徒達に支配を委ねる、と仰っているのです。



つまり、主は、使徒達に「仕える者のようになれ」とおっしゃった直後に、「今、神の民を支配を委ねる」とおっしゃった。このことから、人々に仕える事と支配する事は、深いつながりがある、と考えることができるのではないのでしょうか。それはどのような繋がりでしょうか。

もともと「**支配する**」「**治める**」という言葉には、「裁く」という意味が含まれます。民を裁く力を持つ者が支配者です。しかし、聖書では、「裁き」の目的は、相手を正しくない者と罪に定める、断罪して罰し除外する事ではありません。「裁き」の目的は、その人に正義を示し、正義の道へと戻す事です。つまり、支配する者は、裁く者、裁く者は、正義を示しそこに人々を立ち返らせる者、その為に、支配者は、人々を強制的に従わせる力を神から委ねられている、と聖書は語ります。そして、勿論、聖書が語る「正義」は、自己中心的な人間の正義ではありません。真実の正義、絶対的な正義であり、神の義、神の正しさです。そして、神の義が端的に表れているもの、それは、イエス・キリストの十字架と復活です。

主がおっしゃる「支配」は、人々に神の義、ご自身の十字架と復活、即ち、福音を示し、そこから離れている人々を神の御許に引き戻すこと。それこそ、使徒達が人々に仕えるという事であり、新しい救いの契約に生きる神の民の根本的なあり方だと主イエスはここで仰っています。

それはまさに羊飼いのイメージだと思います。主イエスこそ、キリスト・イエス、過越に屠られる小羊であると同時に、我らのまことの羊飼い。羊飼いは一頭、一頭のことをよくよく知っています。羊飼いにとって、羊はかけがえのない一頭一頭、代わりがきく者ではありません。その羊一頭一頭をよく知ろうとし、最もその羊にあった形で導くには、羊のそばで世話をする必要があります。ですから、主の弟子たちは、主に倣い羊飼いのようにお互いに仕え合う者なのです。そのように、羊飼いとして人々に仕えて生きた者は、やがてイエス様の王国がくる時には、王座について、主の喜びの席に連なることができる、と主は約束してくださいます。

## 5 主イエスのもとに留まる

ですが、今日の使徒達の様子を見ても明らかなように、自分を誇る気持ちを拭い去る事のできない自己中心的な私達が、仕える者となる事は難しいこと。いえ、殆ど不可能と言ってよいと思います。

イエス・キリストの十字架に現れた神の義とは、神の愛なる義、敵を赦す愛であり、相手の自由を尊重することも求められます。ですが、私達は、仕える事によって相手をコントロールしたくなるような誘惑にかられます。

「これだけ仕えたのだから、自分のいう事を聞く義務がある」と取引をしようとしています。しかし、神の義なる愛、愛なる義を示すという事は取引ではない。また、報いを求めずに相手に仕え続けても、自分の思いがなかなか伝わらず、虚しさに駆られる事も一度や二度ではないでしょう。相手が攻撃なんかしてきたら、うんざりしてしまう、とても敵を赦す愛なんて、私達の内にはないのです。罪人を愛し抜く愛はない、イエス・キリストの十字架を示す事で人に仕えるのは、人の力では到底できる事ではありません。私は牧師として教会に仕え始めて、何度もそう確信する経験をしました。それは、牧師だけではなく、親として子供を、夫として、妻として配偶者を、子どもとして親を、友人として友を、真剣に他者を愛した経験がある人なら、現実の厳しさに呻きを挙げたことは一度ならずともあるのではないのでしょうか。そして、私たちは、人に仕える、人を愛する事に於いてさえ罪を犯すのだ、と気づかされているでしょう。

使徒たちだって、そうです。主イエスの聖餐の食卓に於いて、自分達の内誰が偉いかと好んで言い争いを始める位です。主イエスはそんな使徒たちの弱さ、私達の弱さをよく知っておられた。そして、主は、私達をみなしごのように見捨てる方ではありません。必ず道を示してくださいます。今日のところでもそうです。それが、28節「**あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。**」ではないかと思えます。これは十字架を前にして主イエスが過去を振り返り、弟子達をねぎらっている言葉にも聞こえます。そういう意味もあるかと思うのですが、それだけではないでしょう。主は、この後に、神の民の支配権を使徒たちに委ねる、と宣言されているからです。主イエスは、使徒たちそれぞれの才能、信仰や彼らの人徳を高く評価し、素晴らしい賜物に溢れるから、功績がいっぱいあるから、神の民の支配権を委ねたわけではありません。ただ一点、試練の中、主イエスと共に踏みとどまった、その事だけを理由に挙げておられるのです。主イエスだけに信頼し、主イエスとの関係を第一に踏みとどまった。それは、羊飼いとして人々に神の義なる愛を示し導くには、まことの羊飼いである主イエスご自身のもとに留まり続けるしかないのだ、いや、ご自身のもとに踏みとどまり続けていれば、主の命令に従って仕えていくことができる、と主イエスは仰っているかのようです。

今日のテキストの後半、ペトロが主イエスから離反することを予告するエピソードにもその事が描かれています。ペトロは、自分は何があっても、牢にいれられても一緒に殺される事になっても、決して主イエスのもとを離れない、と宣言します。それは自分の信仰の強さを誇る事でした。もしかしたら、高らかに宣言することで、「自分こそイエスさまの一番弟子である」と

他の使徒たちに思わせたい、という気持ちがペトロの中にあっただのかもしれませんが。

しかし、イエスは仰います、「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」自分の信仰により頼んだとしても、何の役にも立たない、鶏が鳴き出すまでの僅かな時間も踏みとどまる事はできない。この世の罪の現実、そんなに甘いものではない。自分の信仰を頼みとするのではなく、信仰の弱い自分の為にご自身をも差し出してくださる神の御子キリスト・イエスを頼みにする、そうしてこそ、私達は初めて人に正しく仕えることができる、神の義なる愛である主の福音を示すことができるのだ、と主イエスがペトロに語っておられるのだと思います。

私たちはどこでいつ、主イエスのもとに踏みとどまる必要があるのでしょうか。それは、私達は人に仕える現場、つまり、私達の生活の現場でイエス・キリストに踏みとどまるのです。イエス・キリストを呼び求め祈りをささげ、心のありたけを聞いていただく、自分の弱さも罪も愚かさも全て主のみ前に明らかにして、主の力を借りるのです。罪とがを示されれば、悔い改めて新しく頂く。そして、祈りつつ聖書を読み、讃美歌を歌いつつ生きる、試練の時は、みことばを待ち望む。日曜日だけではない、礼拝の間だけの主イエス・キリストではない。全ての時間において、主イエスのもとに留まって生きたいと真剣に願い求める。そんな私達の傍らに、必ずイエス・キリストは共にいてくださいます。このことを頼りに、信仰の仲間と共に、七日の旅路を始めたいと切に願います。